

あなたへ



阪神・淡路大震災と東日本大震災の両被災地を手紙で結ぶ連載「あなたへ」。「第11節」の筆者は、阪神・淡路大震災で自宅が全壊、所属するスタジオも半壊の被害を受ける中、公演によって被災者を励ました神戸の洋舞家菊本千永さんと、東日本大震災の被災地を巨大水彩画3部作で描いた仙台の画家加川広重さんです。まずは菊本さんから加川さんへのメッセージです。

＝毎月原則第2木曜と翌金曜に掲載します＝

阪神・淡路⇔東日本 往復書簡

第11節
(往信)

神戸の洋舞家

菊本 千永さん



受賞、舞踊「届ける」メッセージは藤田佳代さんの振り付けによる。

きくもと・ちえ 神戸市東灘区生まれ・在住。洋舞家(モダンダンス)。関西学院大学大学院文学部修士課程修了。藤田佳代舞踊研究所(同市)に所属。1996年以降4回のリサイタルを開催。2002年に兵庫県芸術奨励賞を受賞。

巨大絵画で描かれた被災地。第3作の「フクシマ」を拝見しました。描かれているのは原発事故という、未来永劫、命の循環を断ち切られた光景。絵の前で私は立ち尽くしました。20年前の1月17日。あの日も私は立ち尽くしていました。倒壊した町を前にすすすすもな。満月が神戸の街を照らしていました。1日何も食べていないような状態。でもまた「踊りたい」と思いました。「もう神戸で踊りなんてできないかも」とも考えていました。

巨大絵画で描かれた被災地。第3作の「フクシマ」を拝見しました。描かれているのは原発事故という、未来永劫、命の循環を断ち切られた光景。絵の前で私は立ち尽くしました。20年前の1月17日。あの日も私は立ち尽くしていました。倒壊した町を前にすすすすもな。満月が神戸の街を照らしていました。1日何も食べていないような状態。でもまた「踊りたい」と思いました。「もう神戸で踊りなんてできないかも」とも考えていました。

踊「届ける」東北の地震と津波と原発事故で亡くなった数限りない命たちへを踊って、もう1年がたちます。最初、この絵の前で踊るのは怖いなど不安に思いました。「届ける」は、音楽なしに、手拍子足拍子だけで、ダンサーは下駄を打ち鳴らし踊ります。手拍子も足拍子も下駄拍子も、みんな絵に吸い込まれ「無音」になってしまうのではないかと恐れられました。被災地を再現した絵はそれほど「巨大な沈黙」そのものでした。しかし、絵が削りあげた静寂の空間で、それぞれの拍子は絵に鼓舞されたように響き渡りました。東北と神戸の祈りがつながる場となったようでした。

翻って今回の「フクシマ」。この大作を描くのが前2作と比べ、どれほどつらかっただろうかと胸を突かれました。それでも描かすにはおれず、描かなければならなかったのです。とここで雑煮はお好きでしょうか。この正月、夫の実家の静岡へ帰省した時のこと。雑煮の碗に、義父がつぶやきました。「あーうまいっしょよ」と。中の野菜はどれも義父の畑で取れたもので、味噌も餅も、地大豆と米で義母が作ったもの。雑煮を食べる義父の姿は、おそらく何百年の間、営々と続いてきた土と人が交歓する姿でした。福島にも、当たり前前につたはずの姿でした。



創作舞踊「メッセージ-福島の土の神よ 立ち上げれ」を踊る菊本千永さん(中央)=2014年11月、神戸市東灘区

再生を祈り、踊り続ける

去年上演した「メッセージ-福島の土の神よ 立ち上げれ」は、加川さんにもご覧いただきましたね。客席から、土の神へのエールの手拍子が送られ、土の神が復活し立ち上がる場面面で終わります。土の神として踊った私は、舞台で立ち上がりながら、再び福島の土に命が甦ることを夢想しました。福島の土が育んだ命を、雑煮で頂き、福島弁の「うまかったー」を聞きたい、と。でも「フクシマ」の絵を前にすると、再びこの場に命の花が咲くことはないのでは、と絶望的な思いも去来します。それでも、この絵を見た人は、ここにもう一度命を取り戻したいと願うのではないのでしょうか。「命よめくれ」と。「フクシマ」。巨大絵画。この大きさ。これを前に人間ができることは何か？ 私は思います。加川さんはすごいものを創ったのではないかと。依り代。そう、人は「フクシマ」を依り代に祭りを行えるのではないのか。福島再生を祈る祭りを！山車のように絵を引き回し、その周りで、私も一人の踊り子として幾晩でも踊ります。きっと福島は奇跡の地として甦る…。そんな日が来る。「フクシマ」の前で切望しました。

仙台の画家

加川 広重さん

あなたへ

阪神・淡路大震災と東日本大震災の両被災地を手紙で結ぶ連載「あなたへ」。「第11節」の2日目は、仙台の画家加川広重さんから、神戸の洋舞家菊本千永さんへのメッセージです。

＝毎月原則第2木曜と翌金曜に掲載します＝

阪神・淡路⇔東日本 往復書簡

第11節

(復信)

仙台の画家

加川広重さん



を神戸市内で開催。12年度宮城県芸術選奨新人賞受賞。仙台市在住。

20年前の1月17日、菊本さんが、なすすべもなく立ち尽くしたという話に、私も同じような体験を思い出しました。

東日本大震災発生から2日後、私は、行方不明になっていた祖母らを探しに、仙台空港(避難しているならここでした)へ向かいました。空港は遠くに見



えるのに、そこに続く道は途中から広大な水たまりの中に水没し、近づけません。付近には、養豚場から流された太った豚が何匹も横たわり、子豚が走り回っていました。全てが泥にまみれた異様な光景。呆然とするほかありませんでした。

昨年1月、神戸で開いたイベント「巨大絵画が繋ぐ東北と神戸2014」で、私が震災直後に描いた「雪に包まれる被災地」の前で踊っていたときでしたね。津波が町を襲う、その瞬間を描いた巨大画の前で、大勢の人が踊り、拍子を鳴らす。みなさんの舞踊に、人と自然が一体になっている姿を見ました。地震、津波に抗うのではなく、自然の怒りを鎮め、そして祈る。手にはめられた下駄による拍子の音は、描かれた東北の空に甲高く響き渡っていました。

しかし、決意はしたものの、見えない放射能をどう描けばいいのか悩む日が続きました。そんな時、メールが届きました。13年9月のこと。差出人は、福島第1原発に近い浪江町からの避難者の方でした。「故郷を追われた者の思いを描いていたきたいと切望いたします」。その方の一時帰宅に同行しました。ここは田んぼだった、この川にはこの季節にこういう魚がいた。事故前の日常が一気にイメージできました。震災前日までの日々を思い出させる細部を数多く目にしました。小さな橋の欄干には、子供がいた。それだったのであろう相合傘が彫ってありました。「水素爆発した原子炉建屋を直接描こう」。そんな思いがふつと私の中に生まれていきました。

かがわ・ひろしげ 1976年宮城県生まれ。画家。武蔵野美術大学油絵学科卒業。東日本大震災後、被災地を描いた巨大画3作品を制作。2013年から毎年、巨大画の展示を中心にしたプロジェクト「巨大絵画が繋ぐ東北と神戸」を神戸市内で開催。

福島描く覚悟 神戸で決めた

踊る、描くなどの行為はとも原始的で、科学の一つの到達点である原子力と相反する位置に存在するようには思えます。だからこそ、描くことで問題をより鮮明に浮かび上がらせることができるかと感じています。

昨年3月、神戸で拝見した創作舞踊「メッセージー福島」の神よ、立ち上がれで、菊本さんは「土の神」を踊られました。私も「フクシマ」で、原子炉建屋の中に汚染された土や水のイメージを組み合わせて描き、さまざまな思いを込めました。

それにしても菊本さんの、巨大画を山車のように引き回し、再生を祈る祭りをを行うというアイデアはすごいですね。絵は高さ5m、幅16mの大きさですから、とんでもない迫力でしょうね。巨大画を描く秘より発想のスケールが大きいです。その時は、美術や舞踊などの「芸術」という枠は取っ払って、同じ願いを持つ人々全員で踊れるといいですね。祭りとはそういうものですよ。その時、私の絵は「依り代」であり、福島に思いを届けるための「大きな大きな窓」になれば良いと思います。その時は私も踊りますよ。それでは、藤田佳代先生、舞踊研究所のみなさまにも、また一緒にできることを願っておりますとお伝えください。

神戸の洋舞家

菊本 千永さん

加川広重さんが原発事故を題材に描いた巨大画「フクシマ」は2015年1月、神戸市中央区、デザイン・クリエイティブセンター神戸